

SHAP の健常成人データの集積

○鬼塚沙織（おにつかさおり）1）、鹿野純平（OT）2）、児玉万実（MD）1）、垣田清人 2)

- 1) 医療法人社団行陵会御所南リハビリテーションクリニック
 - 2) 医療法人社団行陵会京都大原記念病院
-

【目的】

当院ではこれまで The Southampton Hand Assessment Procedure 日本語版（以下、SHAP）と上肢評価の関係性について報告してきた。笹尾らにより健常者の総合得点(Index of Function Score 以下 IOF)のカットオフは 95.4 ± 3.0 点と報告されているが、年齢や機能別プロフィールの成績についての報告は少なく、上肢障害の回復程度を把握し難い。そこで、健常成人データを集積し加齢に伴う成績の変化を把握することを目的とした。

【方法】

対象は 2018 年 4 月から 2019 年 1 月までに SHAP を実施した健常者 132 名、平均年齢 50.19 歳 ± 17.9 歳。年齢別の成績を算出するため、10 歳階級年齢群に群分けした。年齢群を独立変数とし、利き手・非利き手の機能別プロフィールの点数と IOF をそれぞれ従属変数とし Kruskal-Wallis 検定をおこなった。(p < 0.01) また、有意差を認めた項目は Sidak の多重比較をおこなった。尚、本研究は対象者本人からの承諾と当院倫理委員会の承認を得ている (R01-001)。

【結果】

利き手 IOF において、20 代・30 代・40 代の群は 70 代以上の群よりも有意差に点数が高かった (p < 0.05)。非利き手 IOF では、20 代 30 代の群は、60 代以上の群よりも有意差に点数が高かった (p < 0.05)。機能別プロフィールの点数では、把握形態によって有意差が出る年齢群が異なった。

【考察】

利き手・非利き手共に加齢による点数の低下を示した。また、非利き手のほうが加齢性の変化が出やすい可能性が示唆された。機能別プロフィールの結果から、把握形態によって加齢性変化に影響を受けやすいものがあることが示唆された。